

ねてまづ月世界探険に出発することになる。

大気圏を抜けるに従い速力を増し、24時間にして月面到達というから米・ソのアポロやルーナよりも速い。途中無重量状態を経験する。このあたりから母なる地球を振り返っているが、「地球は青かった」とは残念ながら言っていない。星天丸は月面上チョコ山（訳して隊長山）その他を詳しく調べ月の裏側をも回ったのち、つぎは飛行11日を費して火星を訪問する。ここでは火星の空中艦隊の攻撃を受け、これを撃退したのち早々に金星へ向う。金星では雲海の下に天人天女の善美の世界があった。金星人は鳥から進化したと見えて、翼を具えて空中を飛翔し美しい声で歌う。（金星は大気が地球より濃くから鳥類の進化に適していたとは理屈に合う。）さて金星人との優雅な交際ののち、つぎは木星へ長駆する。途中で夫人は水星軌道内を巡るという惑星ボルカンの日面通過を認める。また小惑星エロス（1898年発見）に遭いその上で一時駐船したりしている。

木星ではまづ最大の衛星ガニメードに到着。ここにもガニメード人の都市国家があり、柳河卿らは歓待される。ガニメード人は科学において地球人より格段に優れ、ラジウム光線（地球では1898年発見）など自由に活用している。彼らは言葉の代りに、ジェスチャーや幾何図形を使うので意志疎通に困難はない。この星は空気と水と日射が少ないので、都市全体を大きなガラス(?)張り温室につくり、完全な空気調節の生活をしている。しかし空気貯蔵の方法が見付からないので宇宙旅行が実現しないのだという。この世界では空気が余りにも貴重なので空気に関する発明研究が進まないのだ（とは話が苦しい）。将来、地球にあり余る空気とガニメードの地下資源とを交換貿易しようとの話もでる。柳河卿はガニメード人らを乗せて木星の見物に誘うが、彼らは何故か恐怖の色を顔に浮かべ、「いまは駄目だが約一週間後なら」という。待つほどにその日になって星天丸は彼らを乗せて出発し、6時間にして木星雲海を抜け木星表面に2000マイルまで近づいた。木星表面の噴火やとけた岩石の海の壮観に一同感嘆の声をあげる。しかし気がついた時、星天丸は木星引力に強く引寄せられていて、斥力計をフルに働かしても船は落下をつづけるばかりである。柳河卿らは青くなって、神の秘境に深入りしすぎた罰かと恐れ悲しんだが、そのとき同乗のガニメード人がニコニコしながら近づいてきて、船は上昇をはじめたことを示す。彼の差出した図面には、木星と星天丸を描き、その上にガニメードをはじめ5個の衛星を一直線に描いてある。（1900年当時木星衛星はガリレオの4衛星と1892年発見のバーナードだけが知られていた。）衛星が協力して星天丸を上方へ引張り木星引力から脱出させているらしい。彼らは星天丸の動力の限界を知っ

ていて、5衛星の「合」の時期まで待っていたのである。（実をいうと、5衛星の上向き引力の合計は木星引力の2/1000000だから、5衛星の加勢で星天丸を救出させることは難しいのだが。）柳河卿はさらに他の惑星をも訪問したかったが、ここに到って星天丸の限界を知り地球に立戻ることにした。多量の貴金属を土産にもらって故国のロンドン市に帰着したのは、地球出発以来ちょうど80日目であったという。（略算すると星天丸の宇宙間平均速度は300km/sになる。）

× × ×

以上が「破天荒」の荒筋である。涙香訳とあるから原作があるはずで、始めてこの本を読んだ12歳の時から原作を知りたかった。最近この本の再版が出て、その解説（伊藤秀雄氏による）から原作者は英国の作家ジョージ・グリフィスで、原作名は「空中新婚旅行」であることを知った。

涙香の「破天荒」は、東北大の松隈健彦先生（1890-1950）もこれを読んで天文学徒たるべく決心したと何かに書いておられた。涙香の五男黒岩五郎氏は東大天文学科出身で小生の2年後輩である。だからこの本は今から40~50年前に少くとも3人の少年をして専門の天文家たるべく志さしめたことになる。この小文を執筆するに当たり、一夕黒岩五郎氏を東京新宿に誘い出して、ビールを傾けながら懐旧談に花を咲かせたのであった。

（東京天文台）

掲 示 板

IAU シンポジウム

- 次に記すようなシンポジウムが予定されております。
- No. 56 “The Fine Structure of the Chromosphere”
オーストラリア、クウィーンズランド、サーファーズ・パラダイス
1973年9月3~7日
- No. 57 “Coronal Disturbances”
オーストラリア、クウィーンズランド、サーファーズ・パラダイス
1973年9月7~11日
- No. 58 “Formation and Dynamics of Galaxies”
オーストラリア、キャンベラ
1973年8月13~15日
- No. 59 “Stellar Instability and Evolution”